

農業



令和7年10月号

会誌 No. 1735

目次

巻頭言

「果樹振興150年」に思う……………菱沼 義久 3

論 壇

ゲノム編集作物の現在地……………江面 浩 4

総裁現地視察

総裁秋篠宮皇嗣殿下 神奈川県農事功績者表彰受章農家をご訪問
……………吉田 岳志 6

農業懇話会

耕作放棄地解消を活用した新たな営農モデルの確立について
……………西辻 一真 11

農業・農村担い手問題研究会

「第5回農業・農村担い手問題研究会」の開催について
イオンアグリ創造が目指す農業と三つの事業……………福永 庸明 27

表彰農家訪問

常に挑戦！を信念に、酪農を基礎に経営多角化を展開……………本郷 秀毅 42
—熊本県西原村に山田政晴さんを訪ねて—

研究の最前線

ひょうによる農業被害と対策……………横山 仁 49
—被害の軽減をめざして—

農業・農村の現場から

稲作農家と養蜂業者が連携した緑肥栽培「耕蜂連携」の推進

.....井鍋 大祐 56

私の経営と志

津軽平野で水稻栽培のスマート化に取り組む.....新谷 健朗 61

一地域を担う経営を目指して一

農政情報..... 63

編集部から..... 63

大日本農会だより..... 64

表紙写真説明：シリーズ農村の伝統祭事

ひょうげ祭り (香川県 高松市)

ひょうげ祭りは、本来は、高松市香川町浅野の高塚山^{たこづかやま}に鎮座する新池神社^{しんいけ}（地元では、「いけのみさん」とも呼ぶ）の祭礼のことだが、一般的には、そのうちの神輿渡御（みこしとぎょ）行列のこととして定着している。

この祭りは、江戸時代寛文年間、土地の高低がはなはだしく水不足に悩まされていた浅野地区に水を引くために新池を築造した矢延平六^{やのべへいろく}（高松藩の水利土木技術者）の徳をしのぶとともに、水の恵みに感謝し、豊作を祝う行事として始められた。

祭りは、浅野地区集落研修センターから新池までの約2キロメートルをひょうげながらねり歩く神幸が見ものである。ひょうげるとは、おどけるとか滑稽（こっけい）という意味で、ひょうげ祭りという呼び名もここからつけられたと言われている。

神輿の渡御に使われる神具は、すべて農作物や家庭用品などで整えられており、供侍となる人々は、飼料袋の袴（かみしも）にしゅろ皮で作ったまげを着け、蓮の葉をかぶり、足には白足袋、わら草履を履く。そして腰には里芋の茎にかぼちゃの鐙（つば）をつけた太刀を格好よく差し、黒・赤・青などの色鮮やかな顔作りをしている。

毎年9月の第2日曜日に実施しており、県内外から大勢の見物人が訪れている。

（写真：香川町ひょうげ祭り保存会 文：ひょうげ祭り実行委員会会長 松下茂文）